

金融市場動向

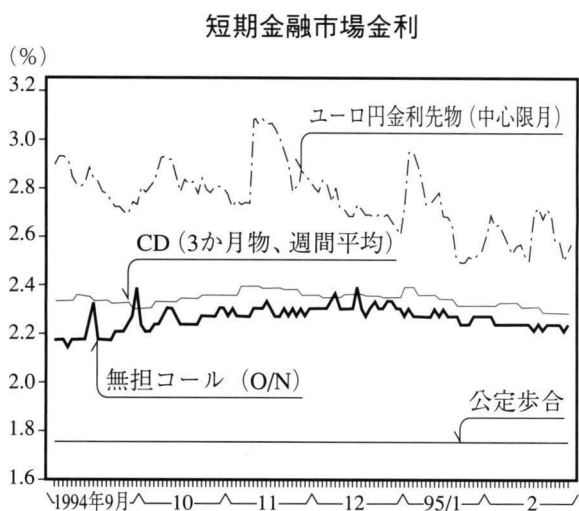
— 平成7年2月 —

(平成7年3月14日)

1. 短期金融市場

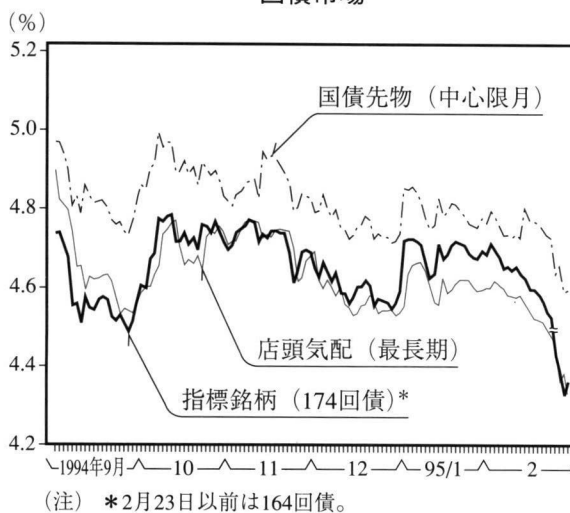
2月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、弱含みで推移した。CD（譲渡性預金）3か月物金利については、若干低下した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、月初にはやや上昇する局面もみられたものの、下旬入り後は大幅に低下した（なお、中旬に限月交替＜中心限月＞95年9月限→95年12月限）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は4兆7,838億円と前月（4兆8,853億円）比若干減少した。



標銘柄は24日に164回債から174回債に交替）は、月中を通じて大幅に低下し、結局4.350%で越月した（前月末4.690%、国債先物中心限月利回り＜14日に95年3月限から95年6月限に交替＞は4.591%＜前月末4.775%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を大幅に上回った。

既発債市場利回り
— 国債市場 —



株式市況（日経平均株価）は、月初から軟調に推移した後、下旬にかけて一段と下落し、17,053円と前月末（18,649円）を大きく下回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、3.39億株（速報）と前月（3.63億株）を下回った。

2. 資本市場

2月の長期国債利回り（指標銘柄利回り、指

株式市場



起債動向をみると、長期国債（6年物）は概ね順調な入札となった（2月8日入札分は募入平均利回り4.112%、応募倍率2.25倍）ものの、超長期国債（20年物）は、総じてみればやや盛り上がりを欠いた入札となった（2月14日入札分は募入平均利回り4.959%、応募倍率3.46倍）。中期国債（2年物）についても、低調な入札となった（2月2日入札分は募入平均利回り2.643%、応募倍率1.79倍）。また、短期国債は、短期金利が低位で安定している中、6か月物、3か月物ともに順調な入札となった（2月7日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.212%、応募倍率2.86倍、2月15日入札分＜3か月物＞は募入平均利回り2.168%、応募倍率4.02倍）。

2月の国内公募普通社債は、長期金利が株価軟化等を映じて低下する中、一部電力等の大口起債のほか、小口の起債が活発化したことなどから、月中5,400億円（1月1,430億円）と1年5か月ぶりの高水準となった。一方、国内エクイティ市場での発行（2月払込み分、増資を除く）は、株価下落の影響から発行延期となる案件もみられ、前月に引き続き低水準の発行

にとどまった（1月320億円→2月1,935億円）。

3. 外国為替市場

2月の円の対米ドル直物相場（東京市場、15時30分時点）をみると、中旬以降、メキシコ情勢に対する懸念や独マルク高の影響もあって上昇し、結局96.93円で越月した（前月末98.58円）。円の対独マルク直物相場（東京市場、15時30分時点）は、66.11円で越月した（前月末65.53円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は114.8億ドルと、前月（134.6億ドル）を下回った。

外国為替市場

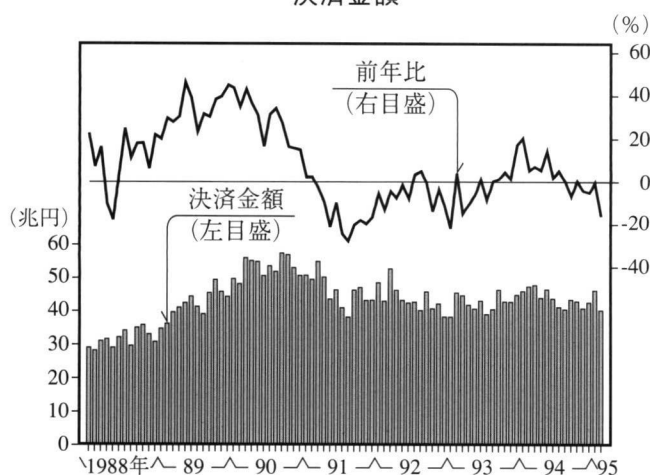


4. 決済

2月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を大幅に下回った（前年比△50.1%）が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（前年比+1.2%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を下回った（前年比△7.7%）。また、国債の決済金額（1営

業日平均)については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った(移転登録:前年比+1.8%、振込口座振替:同+10.0%)。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

2月の資金需給をみると、銀行券要因が1,844億円の不足(前年同月7,267億円の不足)となった一方、財政等要因は465億円の余剰(同9,376億円の不足)となったことから、全体では1,379億円の不足(同1兆6,643億円の不足)となった。

こうした状況下、日本銀行は準備預金の取り崩しで対応した。

3月の資金需給(国債発行織り込み前)を窺うと、銀行券要因については、月中受払同額程度(前年同月2,946億円の余剰)となる見通しである一方、財政等要因は、受入面で法人税を中心とする税揚げのほか、厚生保険料を中心とする保険の受け入れが見込まれるものの、支払面で公共事業費等の年度末資金が嵩むほか、

交付金の支払いも多額にのぼることから、9兆3,000億円程度の余剰(同7兆9,725億円の余剰)となる見通しであり、この結果、全体では9兆3,000億円程度の資金余剰(同8兆2,671億円の余剰)となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

1月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.1%(速報)と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.6%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント低下した。

2月の銀行券平残前年比は+4.5%と前月(+5.2%)を下回った。

2月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+3.1%と前月比伸び率が大幅に上昇した。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は△0.1%と、9か月連続の前年割れとなった。

7. 貸出・預金金利

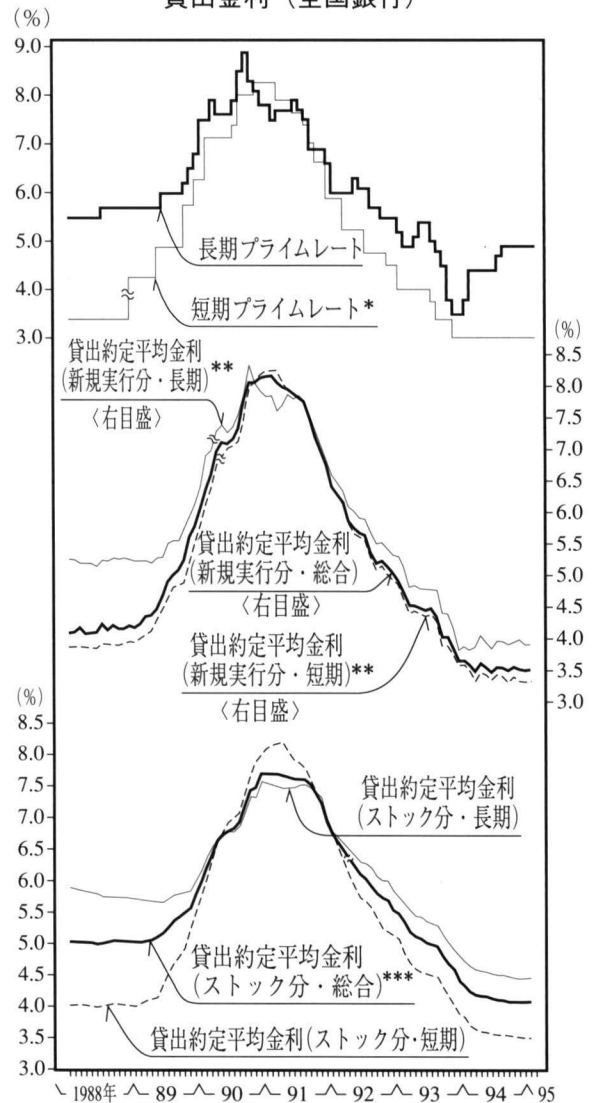
1月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分については、短期が3か月ぶりに小幅上昇したものの、長期では2か月連続で僅かながら低下したことから(短期:前月比+0.014%、長期:同△0.006%)、総合でも僅かながら低下となった(同△0.006%、12月3.478%→1月3.472%)。

また、ストック分については、短期、当座貸越は引き続き低下傾向を持続し、長期も2か月ぶりに僅かながら低下に転じたことから(短期:前月比△0.008%、長期:同△0.005%、当座貸越:同△0.002%)、総合では、19か月連続で既往ボトムを更新した(総合:12月

4.047%→1月4.046%)。

この間、1月の定期預金金利(自由金利分<1千万円以上>、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均)は前月比低下した(12月2.181%→1月2.108%)。

貸出金利(全国銀行)



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。
 ** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。
 *** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)